

国指定史跡 骨寺村莊園遺跡

平成29年度調査概要



平成30年3月
一関市教育委員会

はじめに

一関市巖美町本寺地区は、中尊寺に残される『陸奥国骨寺村絵図』の現地として著名であり、「日本の原風景」ともいえる農村景観を今に伝えています。平安時代以来、中尊寺経蔵の荘園であったことが、中尊寺の古文書群や鎌倉幕府が編纂した歴史書『吾妻鏡』によって証明されています。平成17年には国史跡「骨寺村荘園遺跡」に指定、18年には「一関本寺の農村景観」として国の重要文化的景観に選定されています。

さて、骨寺村荘園遺跡と深い関係にある「平泉」は、23年6月に世界文化遺産に登録されました。世界遺産への拡張登録を目指している「骨寺村荘園遺跡」については、24年度に世界遺産暫定一覧表に登載され、教育委員会では重点的に調査研究を行っています。

本年度は、27年度から継続している「平泉野遺跡」の確認調査を実施しました。本書により調査成果を広く公開し、市民ならびに全国の方々にも当市の文化財を知っていただき、関心が高まることを期待しています。また、地域のルーツを紐解いていくことが、より良い地域づくりの一助になれば望外の喜びです。

最後に、調査に際しては地権者、地域住民の皆さまをはじめ多くの方々のご協力をいただきました。衷心より感謝を申し上げます。

平成30年3月

一関市教育委員会
教育長 小菅 正晴

例言

1. 本書は、平成29年度に一関市教育委員会（文化財課）が実施した、骨寺村荘園遺跡に係る発掘調査（範囲および内容確認）の概要報告書です。
2. 調査対象地は、骨寺村荘園遺跡の構成要素である「白山社および駒形根神社」の隣接地にあたる「平泉野遺跡」です。
3. 本書は、一関市教育委員会（文化財課）が執筆・編集しました。
4. 出土した遺物は、一関市教育委員会が保管しています。
5. 表紙は、平泉野遺跡（若井原194-1地点）の竪穴状遺構の写真です。

中尊寺と骨寺村



国指定重要文化財『陸奥国骨寺村絵図』（複製） 原典は中尊寺蔵

平安時代末期、自在房蓮光^{じざいぼうれんこう}という僧侶は藤原清衡^{ふじわらのきよひら}の命令により紺紙金銀字交書一切経^{こんしきんぎんじこうしよいつさいきょう}を完成させました。その功績により中尊寺経蔵の別当^{べつどう}（責任者）に命じられ、蓮光は自分の領地であった“骨寺村”を中尊寺経蔵に寄進^{きしん}（寄付）しました。こうして中尊寺領としての骨寺村が出発します。

中尊寺には、鎌倉時代後期の『陸奥国骨寺村絵図』2枚が残されています。この絵図は当時の本寺地区を描いたもので、中世の農村景観を伝える大変貴重な史料です。

絵図は、中尊寺と奥州藤原氏に代わってこの地を支配した葛西氏との所領争いにおける、裁判の証拠書類と考えられています。左側の絵図は、家屋、田圃、川や道などが詳しく描かれており、“詳細絵図”と呼ばれています。それに対し右側の絵図は“簡略絵図”と呼ばれ、村を取り巻く山々がダイナミックに描かれています。

また、鎌倉幕府が編纂した歴史書『吾妻鏡』にも「骨寺」が登場します。源氏と藤原氏との戦いであった奥州合戦が終わった後、中尊寺僧心蓮^{しんれん}が源頼朝^{頼朝よりとも}に対し寺の領地を安堵^{あんど}（保障）してくださいとお願いに行きました。すると頼朝は、その場で骨寺（東は鑑懸^{かぎかけ}、西は山王窟、南は磐井川、北は峰山堂・馬坂^{みたけどう・まさか}）を寺領として認めました。この際に示された骨寺村の範囲が絵図に描かれ、さらに四至^{しし}（村境）は現在も地名や遺跡として残されています。

平泉野遺跡(中川9地点・若井原194-1地点)の調査

平成29年度は、「平泉野台地」と呼ばれる丘陵の中で最大の、南東方向に張り出した平場の北部を調査しました。『陸奥国骨寺村絵図』では、丘陵の左(南)側に礎石らしき丸印の並びとともに「骨寺(堂)跡」の文字があり、その痕跡を確認することを目的に発掘調査を実施しました。

駒形根神社から西に向かう林道を約500m進んだ地点から西側に150mの範囲で、4ヶ所のトレンチを設定し、遺構の有無を確認しました。

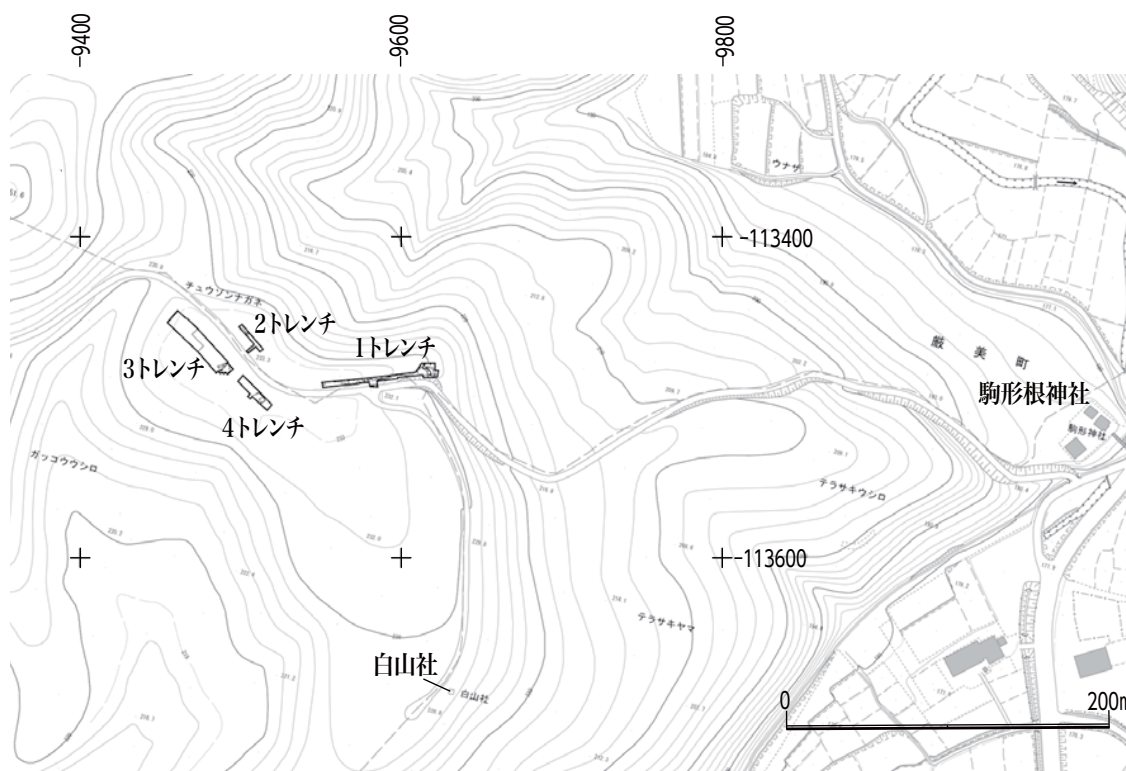


平泉野台地東端遠景(東から)



※一関市博物館 2017 の口絵5を一部改変して掲載

『陸奥国骨寺村絵図』詳細絵図南西部分トレース図



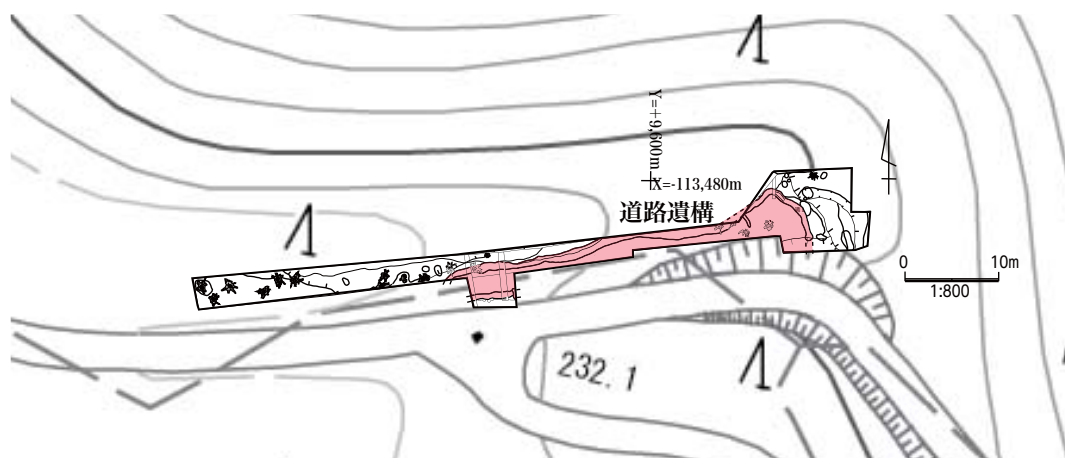
調査区位置図

(1) 道路遺構

林道の北側、平場の北東端にあたる部分に設けた1トレンチの東半で、溝1・2の2本の溝を確認しました。これらは道路の両側の側溝になるとみられ、その間には路面を整地した層があります。

溝1は平場の縁辺地形に沿って西から東に35m、そこから南に向きを変え5m延び、そこで現在東西に走る林道の造成により切られています。西端も直西にある自然の谷地形を避けて、調査区外の南西方向にさらに延びます。上幅0.8m、深さ0.2m、断面形は皿形です。溝2はトレンチの中央部で、溝1の2.4m南に平行して走り、上幅0.6m、深さ0.2m、断面形は椀形です。路面を整地した層は厚さ最大0.2mで上面には溝状の凹凸が多くあり、^{わだち}轍の痕跡である可能性があります。

遺物は出土しませんが、路面の整地層中から火山灰と炭化物を採取し、火山灰分析と放射性炭素年代測定(AMS法)を実施しました。その結果、火山灰は10世紀初頭に降灰した十和田a火山灰で、最新の炭化物の年代は12世紀頃であることがわかりました。このことから、この道路遺構は古くとも12世紀以降、中世に造られた可能性があります。



1トレンチ道路遺構平面図



1トレンチ中央部 道路遺構(南東から)



路面整地層中の火山灰

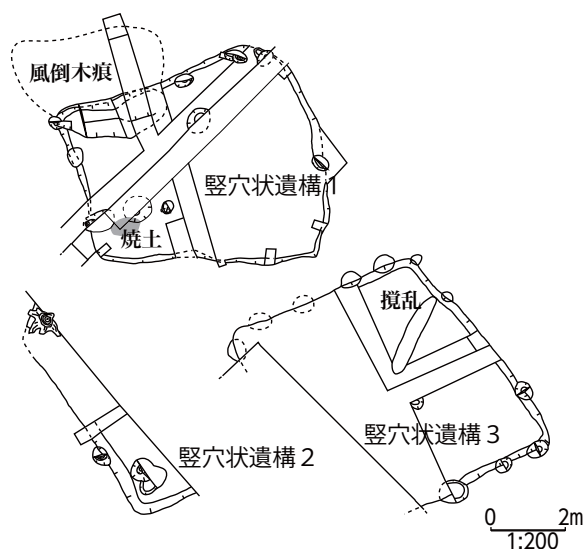
たてあなじょういこう
(2) 竪穴状遺構

2～4トレンチで、各1棟、合わせて3棟の竪穴状遺構を確認しました。全体が確認出来たのは竪穴状遺構1のみで、他の2棟は一部を確認しました。全て暗褐色の自然堆積層の上面から掘り込まれています。

竪穴状遺構1は、3トレンチの東端に位置し、南北4.0～5.5m、東西5.5～6.0mのやや歪んだ長方形です。深さは遺構の確認面から最大0.4mあり、最大で0.2mの貼床(床面を平らにするための整地)層を確認し、その上面から掘り込まれているピット(穴)を10基、焼土を1基確認しました。ピットの多くは壁際にあります。カマドは、ありませんでした。埋土の上層とピットのひとつから、縄文あるいは弥生時代の土器の小片が1点ずつ出土しました。

竪穴状遺構2は、2トレンチの西端に位置し、全体形は不明です。その南半を掘削したところ、深さは遺構の確認面から最大0.24mあり、最大で0.05mの貼床層を確認し、ピットを2基確認しました。そのうち1基は壁際にあります。カマドの有無は不明です。

竪穴状遺構3は、4トレンチの南東に位置し、その南西部は調査区外にありますが、南北6.1m、東西5.35m以上のやや歪んだ方形になるとみられます。その東半を掘削したところ、深さは遺構の確認面から最大0.23mあり、最大で0.15mの貼床層を確認し、その上面から掘り込まれているピットを9基確認しました。その多くは壁際にあります。カマドの有無は不明です。埋土の上層から縄文土器が1点出土しました。



竪穴状遺構平面図



3トレンチ竪穴状遺構1(北西から)



2トレンチ竪穴状遺構2(南東から)



4トレンチ竖穴状遺構3(北東から)



竖穴状遺構3貼床層中の火山灰

3棟の竖穴状遺構は、建物である可能性があります。また、概ね軸の方向が同じで、貼床層があり、ピットの多くが壁際にあるなど共通点が多いことから、同じ時代に造られた可能性があります。また、カマドが確認できたものではありません。11世紀頃より後の竖穴建物は、カマドがなくなり、柱穴が壁際に造られるものが増えると言われており(高橋2001)、今回確認した竖穴状遺構は、その特徴をそなえています。

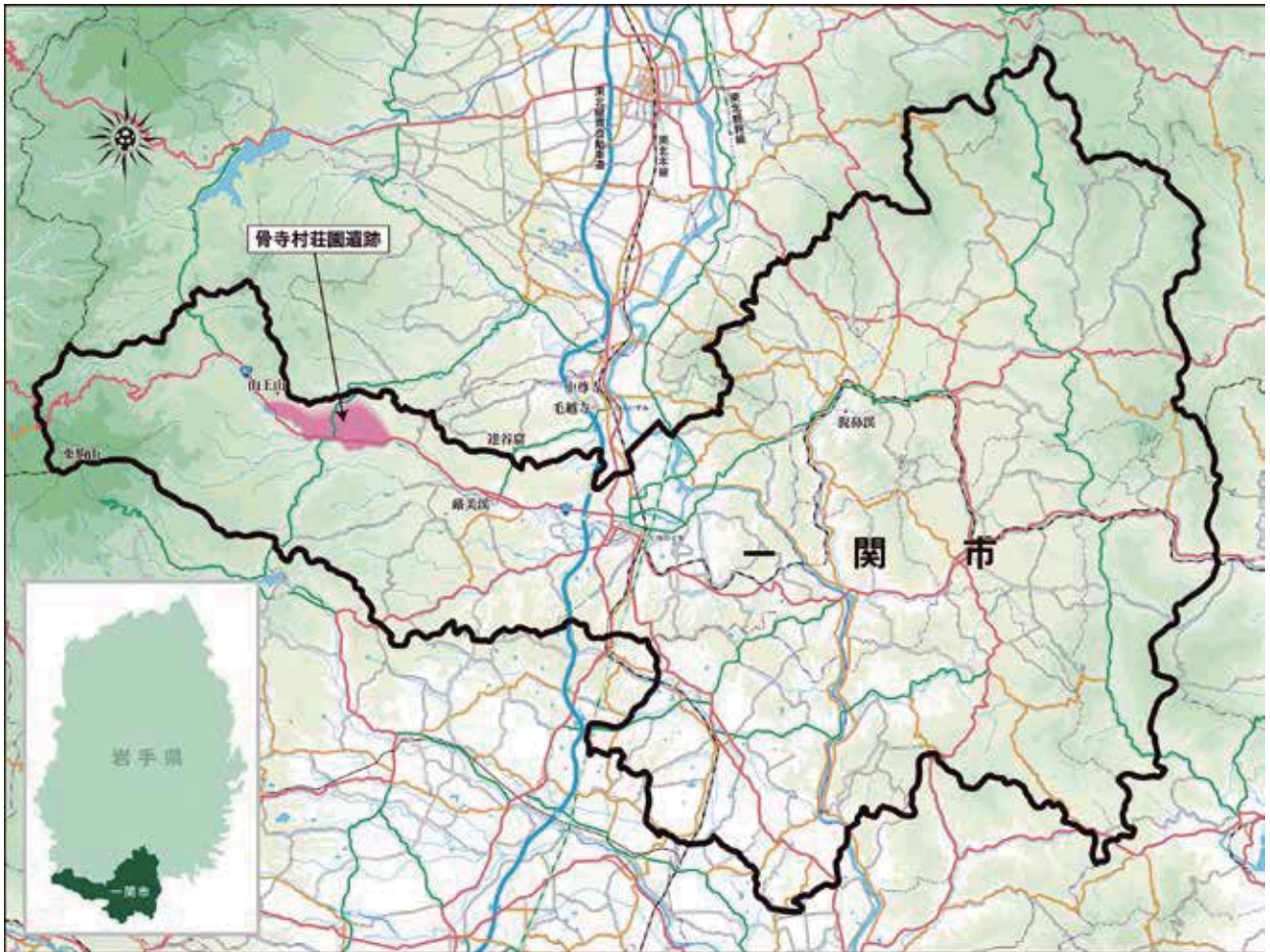
竖穴状遺構が掘り込まれている暗褐色の自然堆積層と竖穴状遺構3の貼床層から火山灰を、竖穴状遺構1・2の貼床層上面やピットから炭化物を採取し、火山灰分析と放射性炭素年代測定(AMS法)を実施しました。その結果、火山灰は10世紀初頭に降灰した十和田a火山灰であり、それより新しい年代の炭化物は確認されませんでした。このことから、これらの竖穴状遺構は古くとも10世紀以降に造られたとみられます。

【参考文献】

高橋與右衛門2001「古代型竖穴住居から中世型竖穴建物跡へ」『東北中世考古学叢書2 掘立と竖穴 中世遺構論の課題』東北中世考古学会編 高志書院



骨寺村荘園遺跡指定範囲図



骨寺村荘園遺跡位置図

国指定史跡 骨寺村荘園遺跡
平成29年度調査概要

【編集・発行】 一関市教育委員会
岩手県一関市竹山町7-5

【印刷】 川嶋印刷株式会社
岩手県西磐井郡平泉町平泉字佐野原21

平成30年3月